

定住を超えて

マルチハビテーションへの招待

長谷川文雄＋ヒューマンルネッサンス研究所

清文社

マルチハビテーションは
理想的な「**生き方**」を
実現する手段である!

本書は、株ヒューマンルネッサンス研究所がこれからの人と住まいに関して行った、一連の研究成果の一部である。歴史的な背景から、具体的な実践例に始まり、地域社会との関係、家族との繋がり、リゾートとの関連、経済的な視点に至るまで、マルチハビテーションを規定する分野をカバーしたものである。

(「はじめに」より)

マルチハビテーションは権利の表現

ここまで、各章にわたって、多様な側面から考察が行われてきたが、この12章では、その背景をなすマルチハビテーションの原理的な考え方と、それに基づく展望に触れたい。

原理——ハビテーションの視点

1

1 生得の権利の実現のための支援・補障環境としてのハビテーション

「生得の権利の実現のための支援・補障環境」

まず、ハビテーションをこのように定義しよう。

この定義によって述べたいのは、人間が生きて、住んで、活動し、成長するということは、人間が生まれついて持っている「宇宙から受けた権利」を一人ひとりその人なりに望ましい形で実現していくことであり、ハビテーションというものは、その実現を助け、もしそこに何らかの障害が起こった場合にはこれを補い、望ま

しい完成像に近づける、そのような機能を持った環境であるということである。

そして、ハビテーションを固定的ではなく、生存し、活動し、成長する人間の動的な環境として、時間的にも人間の存在全部、つまり人生全部に付き合う環境 (Whole Life Habitation) として、これを「権利の実現」の視点から捉えてみたいということである。

人間の存在、成長の基本的なあり方は、その人個々の遺伝子によって約束されている。「権利」とは、実はこの約束ができるかぎり支障なく実現されることそのものであり、このようにみると「生得の権利の実現のための支援・補障環境としてのハビテーション」がどのような機能的条件を持たなければならないか、自ずと明らかになってくるだろう。

ただ現実にはこの「生得の権利」は、自然、社会等さまざまな環境要因により一般に強い阻害を受けており、その支障ない実現は多くの場合困難である。そこに人間が身の回りに自己実現のための支援・補障環境を持たなければならない理由があり、特に、ハビテーションという総合的な形でそれを考え、望ましい形でその実現を図らなければならない理由があるのである。

2 ポテンシャルのある空間

生得の権利の実現のための支援・補障環境とは、具体的に別な言い方をすれば、生存に必要な条件を備えたポテンシャルのある空間のことである。ポテンシャルのある空間とは、何らかの必要性が起こったとき、要求される状況、事象、事物をその必要に対応して現出する潜在的能力を持った空間のことである。この潜在的能力は、人間の存立を支える I/O (インプット/アウトプット) 人間の中に取り入れること、また出すことに関わるすべての機能に対応し、その働きを支援するものである。

この空間は、まず、DNA により約束されたその人の完成像に近づく成育過程を支援するためのインキュベータ (孵化器) として機能する。またその成育 (受精卵の発生より) の過程で生じるあらゆる障害はこれを回復または補

障し、その人としての十全な存在と活動を支援し、その「権利」の実現を保証する機能を持つのである。

Home (人が一人または複数いて、それを、生存を保つ機能がとりまき、成育を支援し保護する施設がある。そのような人と施設の塊は私たちのごく身近でこのような条件を原理的に備えた機能的空間である。それは人間の I/O 機能、支援・補障機能が身の回りの部分について実現されたものである。また社会は、人の存在にとってこのような支援機能を果たすべき生存の媒質であり、都市はこのような必要性に対応する機能の恒常的、有機的、かつダイナミックな集合である、といえれば話は十分わかりやすくなるだろう。

しかし、従来の Home または社会がこのような意味でのポテンシャルのある空間としてどの程度人々の要請に応えているかと問う段になると、それが日常的な実感とは異なり思いもかけず低い状態にあることに驚かされる。まずこの現状、つまり人々の権利がいかに犯されているかその現状の正確な認識に基づき、このポテンシャルのある空間の潜在的機能の中で私たちの社会では、これまで何が実現され、また何が実現されていないか、たかを人々の権利に照らして点検することが重要なのである。

3 ハビテーションにおける回復性

人は存在するとき、まず宇宙空間に固有の領域を占拠し、そこで宇宙空間に負担をかけながら、そこから物を取り入れまたそこへ出すということを存在している間繰り返して、空間を疲弊させている。人は存在するだけで環境を疲弊させる。だから、この疲弊の回復は生存の条件となるのである。ハビテーションの成立を考えるときも当然ここに回復性が前提となる。

「回復性 (Recoverability)」とは、人が生存することによって必ず起こる環境 (空間) の疲弊、破壊が回復することを前提として、このために必要な負担を当初から組み込んだ生産性を考慮するための指標のことである。

そしてこのような負担を自らに課して、自らの存在の媒質を維持することが「権利の対価」となるのであり、この権利の対価と、環境の疲弊と回復がマッチした「生産性と回復性の適正成立」の概念が、ハビテーション

にとって非常に重要なものとなるのである。

回復性における重要なポイントは、疲弊し失われた前の状態に復するということとともに、疲弊を最小限に抑えるというところにある。失われたものを原状に復するということは、それがかつて新しく作られたときの負担よりも、一般により多くの負担を要求するものである。失われたものの価値はこの負担の大きさにより評価されるものであり、失わないために努力を行う方が実質的に負担が少ないことが理解されるだろう。

回復性の低い社会は疲労する社会であり、やがて病む社会である。この状態で生産を上げるためには、さらに疲労を重ねるのである。日本のような中進国の回復性の低い社会が、現代の要請に耐えるためには、ヨーロッパの近代のストック型の社会を経る時間的余裕と社会の余力がないことから、より現代的な非決定的な形態での保続性を早く獲得することが肝要である。この問題は、2、3で順次触れる。

Homeの回復性技術は、いかにして人間の活動、生存を高度に支えながら、いかに環境空間の疲弊を低く保つか、という機能に関わっている。しかし現在の（特に日本の）Homeにおいては、実際にはこのような機能はほとんど全くゼロに近い。Homeから物が排出されるとき、Homeの機能としてそれらのものは安全な、またはリサイクル可能な状態に処理されていなければならないのだが、実際にはそうはなっていない。そこですべてのものはHomeに入るときにすでに安全な、回収可能な状態に前処理されていなければならないことになる。またそこから物が出るときには、それらを十分に安全な状態で回収できる外部システムを持つていなければならない。このような外部の機能がそこに不可欠なのである。このHomeの外部機能は、社会維持機能をなすものだが、Homeの回復性機能は、この社会的維持機能と的確にマッチした受渡しを行うものとして整備されなければならない。入る時も、出る時でもある。「鬼は外型」の環境意識はハビテーションの適正な成立を妨げるものである。

この意味からみると、ハビテーションを考えるということは単にHomeとか小さな環境ではなく、社会メディアそのものを考えることが分かる。

このハビテーションの社会メディアの視点においての整備には、ハビテーションにおける機能の外部化への指向が重要となってくる。ハビテーションの望ましい成立は、内部処理のためにできるかぎり閉鎖した高度な処理機能を持つことと、これをさらにエンハンスするための機能の外部化によって、初めて可能となるものであることをここで認知しておこう。

機能——ハビテーションとマルチハビテーションの関係にあるもの

2

ここでは、存在し営み続けることとしてのハビテーションの機能的側面を考えることとしよう。そしてそれがハビテーションからマルチハビテーションへの方向を指示するものであることを見てみよう。

1では、ハビテーションの成立のための基本的要件として、補障環境と回復性に関してHomeの機能は、閉鎖環境としての処理機能を高めると同時に、その機能に対応する外部機能を設定し、社会メディアとしての全体を考える必要があるというところに達したが、これをさらに拡大し、Homeの機能を積極的に外部化していく方向性、外部化した機能の恒常性、さらに非決定の恒常性への発展を、ハビテーションの新しい成立のあり方として考えることにしよう。

1 ハビテーションに関わる維持機能の外部化——Homeの機能の外部化

ここで外部化の対象は何か、という所からHomeの機能の「置換え可能性」(Replaceability)が問題のポイントとなる。つまり、外部化によって置き換えることができる機能は何かということである。

かつてHomeはすべての機能をその内部に持っていた。出生から育成、教育、生産、情報、そして外部との抗争も含めて、すべてを持った小さな、しかし全機能的な生存の単位だった。それが社会の発展成長に伴って、外部との抗争、生産、教育等の機能が順次Homeから外部化され社会の組織に移り、社会メディアを構成して

いったのである。近代にいたってこれはさらに急速にまた大規模になり、多くの社会機能が発達した。学校も病院も、博物館も、政府もすべてHomeから外部化された機能である。それらは外部化によって置き換えることが可能であり、また同時に外部化することによって効果の高くなる機能だったのである。

最近、身近な所でも炊いた米や磨いだ米を売る店、ファスト・フード、さばかれてパックされた魚、貸しおむつ、紙おむつ、便利屋、学習塾等、かつてHome内部にあった種々の機能に対応するものが外部化し産業となっている例を見ることが多い。これらは置換え可能な機能であり、このようなサービス型、利便提供型の機能から急速に外部化が進んでいく状態にある。

現在、置換えが不可能と考えられるものには、情報、職業、教育環境等がある。これらはその理由から単身赴任等の現象が起こっているところのものであり、パッシブ・マルチハビテーション（望ましくない条件の中で、結果として複数の生活拠点を持つている状態）の原因そのものとなっている。

しかしこれらも、情報学的技術、通信技術の高度化、産業技術の高度な情報化、サラリーの対価としての労働の質と形態の変化、社会メディアの整備等によってやがて吸収されていくものであり、難易度、時間的ずれはありながら順次置換え可能なものの範囲に取り入れられていくだろう。そしてハビテーションの固定化の抑制的条件が順次排除されていく。

このようにみえてくると、Homeの機能から発生した「外部化」が、実際には社会メディアの発生と成長を促し、単なる外部化に留まらず、より広範な形で人間の生存の機能をエンハンスする支援・補障環境を生成していく方向性をその中に内包しているものであることが分かる。

外部化の大きな利点は、第一に外部化された構造の中を流れるすべての「物」は拡散しない状態の中で、適正に管理することが可能だということにある（今はまだ可能だけでほとんど全く行われていないが）。この外部機関を通過することにより、1でも触れたようにHomeに入る時にすべてのものはすでに環境に負担を与えない安全な処理の可能な状態を持ち、またそこから出る時にも安全な事後処理が可能なまたりサイクルな状態でこれを回

収することが可能となる。外部機関を経る場合の方が、Homeから直接排出される場合よりも廃棄物のエントロピーが低いのである。

また第二に、（これが重要な点であるが）それが社会メディアとなることにより、すべての人が、（その地域以外のいわゆる他所者、また外国の人）その機能を自由に使うことができるようになることである。

これにより、どこでも任意の場所に移ったとき、そこに三〇年住んでいたのと同じようにその場所を使うことができ、またその場所に貢献することができるような支援機能を持った環境がで上がるのである。

人々の権利としてのハビテーションの成立の基本的機能の可能性が、これにより開かれることになるのである。そしてこれは同時にハビテーションの拡張の要件をも提示することになるのである。

これはやがて、定住にこだわらなくてもよいハビテーションの条件ともなるものである。

2 権利の条件としての機能の恒常性、連続性（空間、時間、内容）

置換え可能なものとして順次外部化されてきた諸機能は、社会の中で作動する構造として定着、社会維持機能となり、人々はこれを任意の時に使うことにより、それらの機能が宅内にあったときよりはるかに高い利用の効率を持つことが可能となっている。

この外部化された社会維持機能は一般に、必要とされるときには何時でも、また多くの場合どこでも、人々の利用に供される方向にあり、社会財としての機能の充足の可能性をみることができ、都市の一つの大きな特徴は、この外部化され社会維持機能となったメディアが、密度高く配置され、周辺の地域よりも高い利便性が提供されているところにある。

外部化して機能を高め、再びHomeと接触を持ち、その維持機能を分担するようになったものは数多いが、この場合、宅内の端末からのアクセスが容易なものが外部化の効果も高いし、当然利用の頻度も高く、サービスとしても成立しやすい。

このようにしてHomeには、小さいが機能の高い端末機のみを残してすべての機能が外部化され、人々は宅内の小さな端末機により膨大な社会財を任意に利用することが可能となる。

3 機能の恒常化から非決定へ——3への推移部

機能の恒常化（決定論的）は、特に、近代以降顕著に急速に進んだ社会的傾向である。この恒常化した機能がソリッドな都市基盤を構成し、その高密度に構成された機能によりさらに多くの人が集まり、またそれが機能の高密度化を促す、このような連鎖を近代の都市は持つてきた。ここで私たちは、この機能の恒常化が非決定的に成就する現代のシステムについて、さらに考えを進めよう。

一つの視点として、「所有」という点からこれを考えてみよう。

人はなぜ所有することを望むのか、という点、そのものが必ずしも常に手に入るものではなくそれを任意に使うためには、確定的に「所有」しておく必要があるからである。だから、人は空気のように一般に必ず手に入るものについては確定的に所有しようという意志を持たない。その意志を持つのは、水中とか、高山とか空気が手に入らないところに行くときだけである。

常に必ず提供され、常に間違いなく手に入るものは、決定的に所有する必要がない。

社会的に人の存在を支援する機能が恒常化（時間、空間、内容）し、あらゆる状態でそれを享受できる状態になると、恒常化の意識、所有（獲得）の意識に変化がもたらされる。

一日に一本しかない汽車に遅れないためには、人は汗をながしても駆け付ける。そして運よく間に合った人は本当に良かったと思つて汗を拭くのであり、この汽車はその間隔の離散度が大きい故にそれほど価値のあるものだったのである。しかしほぼ二三分くらいで来る地下鉄の銀座線等では、このような風景はあまり見られない。エレベータに乗るときもそれはほとんどない。特に、エスカレータに駆け込み乗車する人の姿は見たことがない。

これは銀座線やエレベータが時間の損失と、それに基づくチャンスの喪失等の損害感を持たなくても済む条件に近づいているからであり、特に、エスカレータではその間隔が人間の感覚でいえばゼロに近づいているからである。

このようにメディアの提供される間隔時間、空間、内容の間欠性の量子が必要程度に小さい場合、人々は損害感を持たずにそれを利用することができ、人々の権利はより高く実現されることになるのである。このような形の恒常性は権利の条件である。

この場合、事実上媒質は連続的となり、非決定となる。エスカレータのどの段に乗ってもまた乗る順序が少し入れ替わっても、事実上ほとんど同じ結果が得られ、一段ごとの決定的な価値の差はなくなる。つまり人はその選択において自由になるのである。そしてこのような条件では、より多くの人が、同じ容量の空間で、より多くの自由を持ちながら存在し活動することが可能となるのである。

ここで、ハビテーションにおいても同じような恒常性の条件が満たされたら、人々は決定的な方法でHomeを所有しなくてもよいかもしれないか、と考えてみよう。非決定の世界の中では、時空間の新しい現代的な高度な利用、インプレーションが可能となり始めるのである。

様態——マルチハビテーションの視点

3

1 非決定的な恒常性

ここでは、恒常性と、その非決定的な方向への流れをさらに積極的に考えてみよう。ハビテーションにおける非決定的な恒常性は、ポテンシャルのある空間の中での、特定の条件の成立する間のみの存在という形で実現する。つまり、必要なものが、必要なときに（だけ）必要な状態で存在する。この場

合の恒常性とは、必要が発生したときにそれに応えて必ず存在するならば、必ずしもあらゆる時間に存在していかなくてもよいことである。

明りは何時でもついていたなければならないわけではない。人がその空間を使うときだけ、あたかもいつもついていたように点つていけばよい。本もいつもすべてがそこになければならないわけではない。必要などときだけ情報として使用可能であればよい。使わないときはなくてもよいのである。使うときにそれが必ず(恒常的に)手に入ればよいのである。このような非決定的な恒常性の要求に対応する技術は、部分的にだが、すでにでき上がっている。

道可道 非常道(老子)

これは、道々とは常に存在しているものではなく、必要ときに必要な形を取るものであり、必要性がなくなつたときそれは無に帰するという老子の哲学を端的に表している言葉である。

ハビテーションにおいて、この非決定的な恒常性を考えると、人は必要ときだけハビテーションの条件を満たした空間を持てばよいことになる。この意味から、人は従来の家(home)を決定的に所有していなくてもよいことになる。この状態が社会機能として可能となると、それは、Homeの中からHouseの機能の外部化を許すものとなり、ハビテーションに革命的な変化をもたらすことになる。

そして本格的なマルチハビテーションの可能性に長足に近づくことになる。

このような未来像を語ると、建設業界は個人住宅の着工件数が減ると恐慌をきたすかもしれない。しかし、単純にそうはならないだろう。なぜならば、このような恒常性を非決定的に実現するためには、現在の個人住宅の建設とは比較にならない高度な社会的維持機能、インフラ・ストラクチャの構築が必要であり、これが今後の社会投資の大きな部分を占めるようになるからである。それは多様な必要性に対応した社会的単位空間を日本中の必要ならぬところに創設することであり、あたかもラングドックやソフィア・アンティポリスでフランス政府が行つたような国策としての新しいハビテーション空間の開発を、全国規模でしかし適正に行うことになるのである。

るのである。

2 Multi Habitation — 定住の拡張 非決定的定住

行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず

よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし

世の中にはある人とすみかと、またかくのごとし(鴨長明)

この中には、非決定的な恒常性と、その中のハビテーションのあり方が図らずも(もしくは彼が図った通り)的確に言い表されている。ここで「うたかた」を泡ではなく渦と考えると、流体力学的により理解しやすい。つまり力学的条件のあるときに発生し存在し、またそれがなくなると消える。人の在るところは久しく留まるところがないのである。そしてその存在の可能性は媒質としての流れのあらゆる所に確率的に拡がっている。つまり人は自分の存在できる条件の有るところすべてに確率的に存在し、住み、移動し、生活できるのである。

これは、定住の拡張としてのマルチハビテーションに直接繋がるものである。

定住の拡張とは、人は定住はするが、その領域、範囲はより広いものとなり、やがてそれは地球全体に拡がる、このような定住の領域の拡大のことである。

前節で触れた社会維持機能が整備されると、特に、それが地球規模で整備されるようになると、人々の定住領域は地球全体に拡がることが可能となり、人々は任意の時に任意の所に存在し任意の活動を行い、その地域に貢献し、またそこから利益を得ることができるようになるのである。この定住の領域は現在は地球上だが、やがてスペースコロニー、惑星上に拡がるだろう。人々は宇宙に確率的に定住することになるのである。

これを、ここで、非決定的な定住と呼ぼう。このような形は私たちの身近でもすでに見ることができる。一応定住の本拠を持ちながら、常に地球上の至るところに現れ、どこにいるのか確定的に観測認知されるまでは、ほとんど確率的に地球上のあらゆる所に存在している、これを比喩的に量子論的定住と呼ぶことにしよう。そ

してこのような活動を支援する社会的維持機能が整備されており、それを自由に利用することが可能であるということは、人の存在、存立にとって、この上なく重要な権利の実現となるのである。

私がここで述べているマルチハビテーションの姿は、一般にその名において考えられているような、定住の本拠があり、それ以外のテンポラルなハビテーションが複数あるという意味でのマルチハビテーションとは大分異なったものと感じられるだろう。しかし、この考えにしばらく付き合っていただければ、それがマルチハビテーションの本質であることを理解していただけるだろう。

私たちは、欧米の社会にいる時、このような量子論的なマルチハビテーションを行うことが相当に可能であるという実感を持つことが多い。それは初めて訪ねたところでも、情報や施設の利用のしかたが分かりやすい状態にあることによる。貸アパートメントの多くが家具付きで、人はほとんど体一つで移動できるという常識（とそれを支えている社会意識）もその要因である。

人の援けを必要とする社会は未成熟である。社会の成熟は、より望ましいマルチハビテーションの実現を可能とする。

人々の必要とするところはますます多岐にわたり、その訪れる先も極めて広域となり、またこのように流動するすべての人々がそれぞれ全く固有の行動を取る、このような非決定の全体に対応する地球社会の媒質としての環境、これがマルチハビテーションの本質なのである。

3 ホテル・コンパウンド——権利の非決定的な実現

地球上の任意の場所に、任意の形でマルチハビテーションを行うには、前述のように非常に機能の高い支持、支援構造の存在が欠かせないが、それはメディア・コンパウンド、またはメディア・アマルガメーションと呼ばれるような形で実現されるものである。メディアの諸要素が必要に応じて自由に組み合わせられ、合金状になったものが、ここでいうメディア・コンパウンド、またはメディア・アマルガメーションである。これは単なる

マルチ・メディア、メディア・ミックス等とは異なり、アマルガメイトされることにより、それ以前の個々の部分の特性を超えた新しい全体としての機能、上位構造を持ち始めるのである。これによって任意の場所で、任意のアマルガムを、任意の目的において持つ権利が、初めて保証されるのである。人々はそれぞれの必要性に応じた異なった機能のアマルガムを、地球上のあらゆる所に確率的に持ち、それによってその場所の創造性と生産性に貢献する。これがマルチハビテーションの本質的な機能である。

これは今すぐにはないが、ある日実現するマルチハビテーションの姿である。まず、ここまでフィードバックを行ない、その地点から現在を眺めると、これから具体化していく形が見えてくる。

このような機能を実現し、支援するものとしてのメディア・アマルガメーションの具体的な形態としては、現存するメディアの形から、ホテル・コンパウンドと呼ばれるような機能を持ったものが、最もこの目的に対応したものと考えられる。

ホテル・コンパウンドはまさに「生得の権利の実現のための支援・補障環境」であり、人間の存立のためのI/O機能に対応する外部機能を備え、これを支援する機能的空間である。

そこには、人間の物質のI/Oに関わる機能、つまり消化管に対応する機能、知的I/Oに関わる機能、つまり大脳とすべての入出力器官に対応する機能、活動と回復に関わる機能、移動に関わる機能、およびこれらすべての接触機能が備えられている。

ホテルは元来このような機能を発生的に持っていた。ホテルには語源的に人を喜んで迎え入れるという意味がある。

現存のホテルは部分的にこのような機能を持っているが、ホテル・コンパウンドに近い形で実現された例として、ボストン市にあるコプリー・プレイスをあげよう。

コプリー・プレイスは二つの高層ホテル、一〇〇の高級店、九つの映画館、四つのオフィス・ビル、アパートメント、一、四〇〇台収容の駐車場等を含み、総床面積は三四万㎡に及ぶ大きな集積である。これらの機能

的空間は、道路を中に含んで、スカイウェイにより連結された建築群によって構成されており、すでに単なる建築とは呼べない巨大な地域社会をつくっている。

重要なのはこれらの機能が、単に寄せ集められたものではなく、それぞれ相互に有機的な関連を持ち、まさにアマルガム、コンパウンドとなって人々の多様な必要性に応えていることである。ここには、その日にそこに到着した人にも、その土地の人と同じようにこれらの機能を使うことができるような支援機能、使いやすさがあり、将来のホテル・コンパウンドの原初的な形態をそこに見ることができるものとして、注目すべき開発である。

パリ市西郊のデフアンス地域も、やや巨大すぎ、また商業性に偏ってはいるが、やはりこのようなコンパウンドを構成した新しい市域開発となっている。

ホテル・コンパウンドに不可欠なものは、高度な情報ネットワーク機能である。そして、高度にインテリジェントなデータベース機能である。この情報ネットワークは世界中の同種の情報センターと高速回路および通信衛星により結ばれ、どこからアクセスしても世界中の各種データベースの情報に任意に到達することができ、同時にすべての地球人と交信、交流することができる。またWhole Life Habitationに対応するホテル・ホスピタルの設置も必須である。

このような機能があつて初めて、生得の権利の実現のための支援・補障環境と呼ぶことができ、これが地球上の必要な位置に点々と散在し、それぞれ固有の特徴と機能を持ちながら作動する、これによって人々は初めて、地球上のあらゆる所に確率的に存在するマルチハビテーションと呼ぶに足る状態に身をおくことができるようになるのである。

このマルチハビテーションの媒質としての機能的空間の存在は、任意の場所で、任意のハビテーションを、任意の目的において持つ権利の実現に不可欠な条件であり、人が(自分が)遍く地球上の任意の所において、必要とする任意の行動を取ることが可能となる世紀への橋渡しをなすものとなるだろう。

大江 守之

〔第五章〕
厚生省 人口問題研究所人口政策研究室 室長

木村 通治

〔第四章第三節〕
埼玉短期大学 講師

嶋村 和恵

〔第六章〕
早稲田大学 商学部 専任講師

竹原 由佳子

〔第四章第一節、第二節、資料〕
〔株〕ヒューマンルネッサンス研究所 研究員

中野 善浩

〔第一章、第二章、第七章、第十三章〕
〔株〕ヒューマンルネッサンス研究所 主任研究員

長谷川 文雄

〔はじめに、第十一章〕
東北芸術工科大学 教授

端山 貢明

〔第十一章〕
東北芸術工科大学 教授

檜 貢

〔第八章〕
財団法人日本都市センター 主任研究員

前田 博

〔第一章〕
財団法人環境文化研究所 主任研究員

室崎 純一郎

〔第九章〕
北陸電力(株) 広報室 課長

横内 憲久

〔第十章〕
日本大学 理工学部海洋建築工学科 教授

株ヒューマンルネッサンス研究所

オムロン株式会社の100%出資により、1990年に設立。

生活者の視点に立った調査研究を行うだけでなく、その成果の実現を目指してアクティブに行動するシンクタンク（Do&Think）。現在、「人間の生き方」「住まい」「都市」「健康」等、幅広い分野において活動を進めている。

●〒105東京都港区虎ノ門3-4-10 ● TEL.03-3436-7276 FAX.03-3436-7209

定住を超えて—マルチハビテーションへの招待

一九九三年七月一〇日

一九九三年七月一日

長谷川文雄+株式会社ヒューマンルネッサンス研究所◎

成松 丞一

発行者
株式会社 清文社
発行所
●東京都千代田区神田小川町354(三田ビル)
〒101電話03(3291)2651番 振替東京8-101996 振 FAX03(3291)8663
●大阪市北区南堀町7520(青山ビル新館)
〒530電話06(361)2597番 振替大阪0-18351番 FAX06(361)2797
●広島市中区銀山町254(高島ビル)
〒730電話082(243)5233番 振替広島1-29252 振 FAX082(243)5293

印刷所
大村印刷株式会社

造本・装幀
丸岡一志 (株)ヨシタコーポレーション

手動写植印字
横田英子 (株)ヨシタコーポレーション

定価
1,000円 (本体1,940円)

●著作権法により無断複製・複製は禁止されています。盗丁本・翻丁本はお取替えいたします。
ISBN4-7960-4293-8 C0036 P2000<T-1>